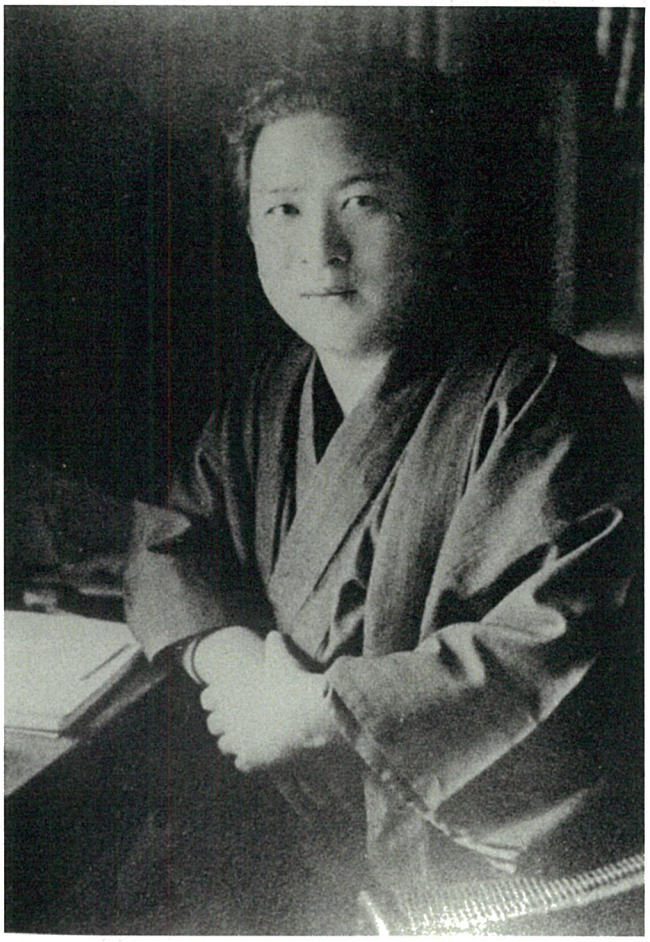


小田原文学館

特集展示

福田正夫

小田原が生んだ民衆詩人

福田正夫（明治２６年（１８９３）～昭和２７年（１９５２））という詩人をご存じでしょうか。

小田原に生まれた福田は、小学校教員のかたわら詩作に励み、農村での暮らしを題材にした詩集『農民の言葉』を自費出版しました。また、井上康文らと雑誌『民衆』を発行しました。福田をはじめとした同人は民衆詩派と呼ばれ、大正期の詩壇で注目されました。

明治以降、別荘地として発展した小田原には、北原白秋など多くの文学者が訪れ、執筆活動を行いました。彼らとの交流が、福田ら小田原出身の文学者が活躍する素地を作り出したのかもしれません。

大正デモクラシーの中で庶民の暮らしを題材に新たな詩のあり方を模索した福田の足跡は、私たちが日々使っている言葉について、ひいては文学のあり方を考えるきっかけになるのではないでしょうか。

福田が生誕１２０年を迎える本年、福田の四女・福田美鈴氏より直筆原稿などが寄贈されました。本展では、当館所蔵の書簡などとあわせて、福田の足跡を振り返ります。

本展が、小田原で生まれた詩人の足跡に触れるとともに、小田原の文学により興味を深める機会になれば幸いです。

平成２５年３月　小田原文学館

第一章　民衆詩人としての出発

福田正夫は明治26年（1893）、小田原町十字（現・小田原市南町）に小田原藩の士族・堀川家の五男として生まれ、明治43年（1910）に小田原町新玉（現・小田原市栄町）の福田家の養子になった。

その後、大正4年（1915）に橘樹郡（たちばなぐん）御幸村尋常小学校（現・川崎市立玉川（ぎょくせん）小学校）に教員として赴任した。この頃「自由詩の父」であるアメリカの詩人・ホイットマンやその弟子・トローベルに親しんだとされる。

同年12月、福田は処女詩集『農民の言葉』を自費出版した。この作品は『早稲田文学』などで評価され、福田は民衆詩人として注目されるようになった。また大正7年（1918）には、小田原在住の富田砕花（さいか）らと雑誌『民衆』を創刊し、福田ら同人は民衆詩派として注目されたが、芸術性の欠如といった点から批判もあった。

この間、福田は大正5年（1916）に足柄下郡片浦村尋常高等片浦小学校石橋分教場（現・小田原市立片浦小学校）に赴任したが、大正10年（1921）に退職して筆一本の生活に入った。

1－1　熱海線小田原駅開業記念絵葉書（大正9年（1920））　当館蔵

明治20年（1887）の開通当初、JR東海道本線は現在のJR御殿場線のルートを通っていた。しかし、山北～沼津間の急勾配を避けるため、国府津から熱海を通る計画が浮上した。大正4年（1915）に鉄道院が熱海線の敷設を決め、大正9年（1920）に国府津～小田原間が完成するとともに小田原駅が開業した。この写真には、鉄道開通を祝う小田原幼稚園の稚児行列や駅舎が写っている。

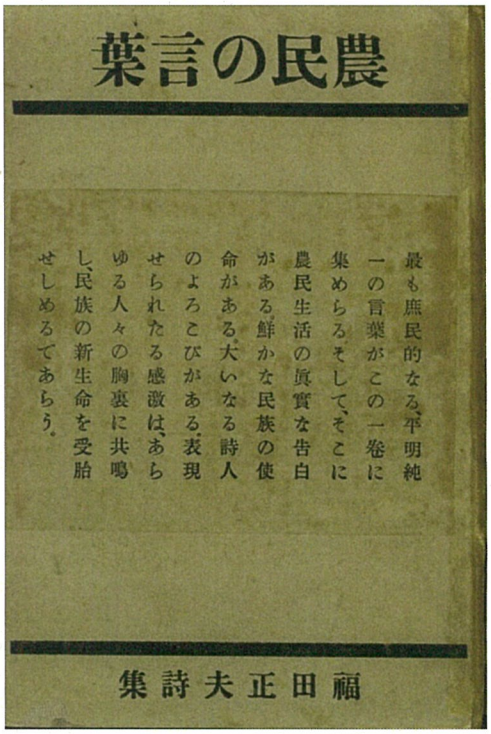
烏帽子をかぶった人物が福田の養父、福田誠信とされている。誠信は、小田原市内で裁縫女学校を経営するとともに、後に早川小学校（現・小田原市立早川小学校）校長も務めた人物で、二宮尊徳の信奉者だったという。

1－2　『農民の言葉』（南郊堂書店、大正9年（1920））　当館蔵

福田の処女詩集。白鳥省吾（しろとりせいご）によれば、「原稿をまとめて私のところにやって来た。私が印刷所から装幀まで世話し」て自費出版したという。

当時教員として勤務していた玉川小学校での経験を基にしており、序文には「生活そのものの中から、衷心感激し得たことを其儘に体現し」、「最も平明なる言葉を以て、重に農民の生活を語つ」たと記されている。「四十男の縊死」「農村より」「農民の言葉」など全五章から構成され、祭事・宴の様子・畦道から見た風景など、口語自由詩の形式で、農村の様子が描かれている。

この詩集は『早稲田文学』で、「庶民の生活の中へ入つて行つた、その首途の産物として（略）推奨するに足る」と評価され、福田は新進気鋭の詩人として認められた。



彼はやがて午前中をごそごそと仕事に費した後、原稿用紙の一括したのを大切さうに風呂敷に包んで、出かけた。

その包みは詩集「農民の言葉」の原稿であつた。彼が七年の間沈黙して書きつゞけた果てに、漸く新しい自らを表現し、個性の中に農民の生活を調和せしめた詩の凡てであつた。

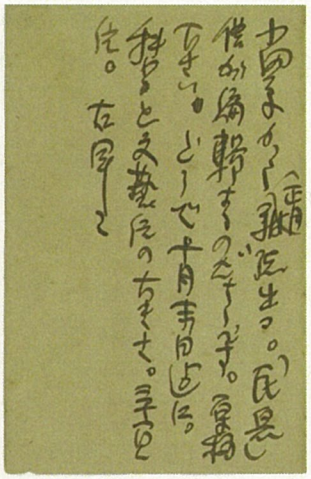
彼はその中に農民のよろこびばかりをうたつた。あまたの悲惨にして疲れた農村の生活の中に、何故彼はその中から純なよろこびを取つたのであらうか。仙吉はかう考へてゐた。凡てはかく生きることに生きると。その生きるのはよろこびであり、幸福であつて。彼は「農民の言葉」の中に、そのかく生きねばならぬよろこびの詩ばかりを取つた。

農村は疲れてゐる。彼はそれをよく知つてゐた。（略）

だが仙吉にとつて来るべき社会はそこになかつた。疲れたものを疲れしめよ、新しいよい種子はよろこびの農民に生まれる、と自信せしめた。だが既に青年問題にさへ彼は破れた、寂しいあきらめきれない心は、詩集の出版によつて癒されねばならなかつた。彼はその包みを持つて東京の笠井寥花や山岸省吾をたづねた。そして凡てを山岸にたのんで出版の手続をとることにした。

福田正夫『未墾地』（聚英閣）より

1－3　白鳥省吾宛葉書（大正6年（1917）10月7日）　当館蔵



自分の編集で新しく発行する雑誌の名称が『民衆』と決まったこと、その雑誌への寄稿を依頼している。文中に出てくる『科学と文芸』は、民衆芸術運動の拠点となった雑誌で、福田も詩を寄稿していた。

原稿が集まり、いよいよ雑誌の題名を決めるときは、私と二人で辞書をひいて二人で話し合った。福田氏はトラウベルの詩の、Ｔｈｅ　Ｐｅｏｐｌｅを、庶民と訳していたが、庶民では、少し堅すぎるといっていたし、Ｍｏｂというのに民衆、大衆という訳語もあるが、愚民とか暴民という訳語もあり、愚民というのは嫌だが、民衆というのはいいじゃあないかというので、結局「民衆」ということになった。私は大いに賛成し、創刊号の校正には福田氏に連れられて汽車に乗って藤沢の印刷所に行った。福田氏は学校があり、小田原から石橋まで通っていたし、二、三号は福田氏が編集したが、校正は私が殆んどやり、やがて編集も私がやるようになった。

井上康文（いのうえやすふみ）「「民衆」創刊前後」

（小田原市立図書館編『福田正夫　追想と資料』より）

雑誌『民衆』

福田正夫・井上康文・白鳥省吾・川崎長太郎・富田砕花など小田原在住・出身者を中心に、大正7年(1918)～10年(1921)の間に発行された雑誌。トローベル作品中の“The People”を「民衆」と訳し誌名にしたという。

明治期の詩は、文語体を使い、リズムを重視した作品が主流だった。しかし、明治末期にホイットマンなど外国の詩が紹介されるとともに、口語を使った詩が発表されるようになった。また石川啄木らがリズムにとらわれない自由詩を発表し始め、さらに大正デモクラシーの中で、福田らのように口語自由詩の形式で個人の尊重や人間の解放といった理念を掲げる運動が盛んになった。『民衆』創刊号には「われらは郷土から生まれる。われらは大地から生まれる。われらは民衆の一人である。（略）われらは自由に創造し。自由に評論し。真に戦ふものだ。」と掲げられており、彼らの考え方や抱負がうかがえる。

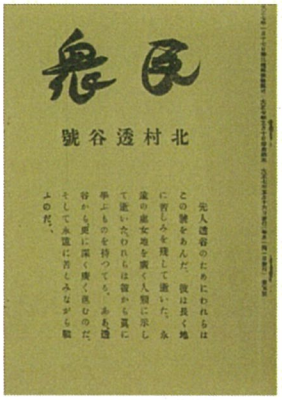
『民衆』は毎回300部程度が発行され、詩や評論、同人の消息などが掲載された。また井上ら同人の作品、北村透谷やトローベルなどが特集として取り上げられた。当初は福田が編集を担当したが、後に井上が実務を担ったようだ。以前は16号で廃刊したとされていたが、実際には17号が発行されたことが判明している。

1－4　『民衆』創刊号（大正７年（1918）１月）　当館蔵

同人による詩や歌、小説が掲載されている。表紙には「われらは郷土から生まれる。われらは大地から生まれる。われらは民衆の一人である。（略）われらは自由に創造し。自由に評論し。真に戦ふものだ。」と書かれており、同人の考えがうかがえる。

同人の白鳥省吾は後に、民衆詩人の共通点として「現代に対する情熱を持ち同時に未来へ飛躍する肯定的な精神」「着実なる現実味、（略）あらゆる人間、あらゆる事物に詩を見出す取材の広汎」「言葉の自由で平明なること」を挙げている。

1－5　『民衆』第５号（大正７年（1918）５月）　当館蔵



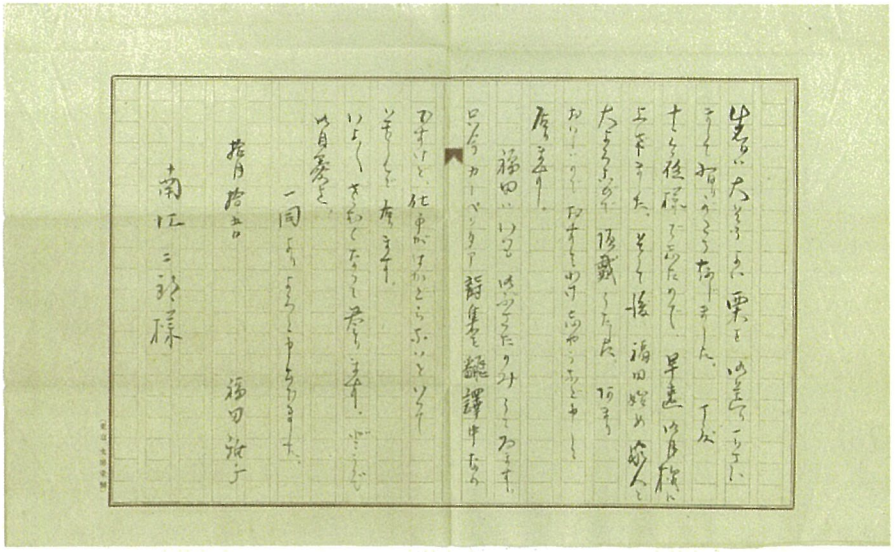
小田原で生まれた北村透谷を特集した号で、生家の写真や評伝が掲載されている。表紙には「われらは彼から真に学ぶものを持つてる。ああ、透谷から更に深く広く進むのだ」と書かれており、福田らが透谷を理想としていたことがうかがえる。

1－6　『世界の魂』（一歩堂、大正10年（1921））、当館蔵

福田の第二詩集。主に大正７年（1918）の作で、雑誌『科学と文芸』・『民衆』に掲載された長編詩が収録されている。「序詩　魂の歌」「孤独の歌」「人間の歌」「世界の歌」の構成。あとがきには「私達は近代人として詩の開拓の路をすゝんで来た」と記されており、福田の意気込みが読み取れる。

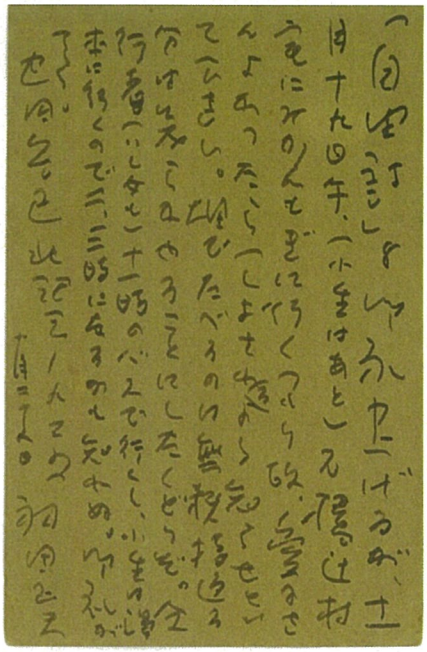
福田は同じ文章の中で、小田原での自らの現況に触れている。「こゝは自然の地である。波の音が遙にひゞいて来る、野に出れば夕日に輝いた山々が見える。その時、足柄の山脈は凡て彫像のやうに半面を赤く映し出してゐる」という一節からは、小田原への愛着がうかがえよう。

1－7　福田雅子から南江二郎宛書簡（大正10年（1921）10月16日）　当館蔵



南江二郎（なんえじろう）（後に治郎）から送られた栗へのお礼と、福田の仕事が進まない様子が記されており、当時福田がイギリスの詩人・カーペンターの翻訳を手掛けていたことが分かる。宛先の南江は坪内逍遥・小山内薫らに師事した詩人で、後に社団法人日本放送協会（現・NHK）に入った。

差出人の「福田雅子」は福田の妻・いし子のこと（福田美鈴氏談）。



1－8（左）　『詩と音楽』創刊号（アルス、大正 11 年（1922）9 月）　当館蔵

北原白秋・山田耕筰を中心に、「詩と音楽の両者を、完全に、有機的に融合せしめる」ことを目的に創刊された雑誌。三木露風や前田夕暮といった詩人や歌人、近衛秀麿ら音楽家も寄稿した。本号に掲載された評論「芸術の円光　主として詩について」で白秋は、「思ふに、新を趁ひ自由を叫び、旧を憎み均整を嗤ふ人々の急進的態度にも、可なりの無理解と反発の暴露があ」り、「自己の偏執に謬られてゐる」と民衆詩派を批判している。

しかし白秋は「その時により、その人により、いかなる詩形の採用をも許さるべきである」としつつ、「恋は一目より初まる。詩もまたその第一音から魅了する」と主張している。また「詩人は常にそれ自身の呼吸、心音、内律の如何に耳を傾くべき」とし、「象徴の秘境にこゝより生じ、真の自由形はここに成る」とも記している。

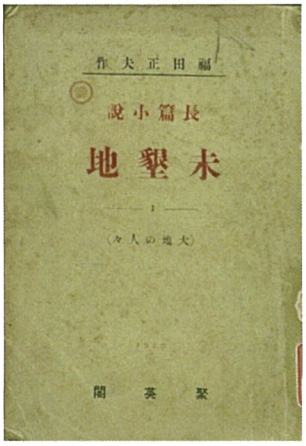
1－9（右）　井上康文宛葉書（年不明、10 月 25 日）、当館蔵

石橋（現・神奈川県小田原市）にみかんもぎに行くので、一緒に行かないかと誘っている。文中に出てくる「いし女」は福田の妻・いし子のこと。

第二章　幅広い活躍

福田正夫は『民衆』創刊以降、井上康文らと雑誌『主観』（後に『焔』に改題）を発行するとともに、詩の分野を開拓する目的で、長編叙事詩（物語を記した詩）を多く執筆した。民衆詩派は昭和期に入ると衰退したが福田の活動は衰えず、詩と音楽・舞踊との共演や小説執筆、国民歌謡の作詞や家内雑誌の発行、俳句など様々なジャンルで足跡を残すとともに、「小田原小唄」など小田原に関係する作品も手掛けた。なお、この間、大正 12 年（1923）の関東大震災で原稿や本を失い、東京市外世田谷下北沢（現・東京都世田谷区）に移った。

2－1　『未墾地』（聚英閣、大正 9 年（1920））　当館蔵



福田の自伝小説。主人公は川崎の小学校に勤める訓導（教諭）の山口仙吉（福田自身）で、村の青年達に二宮尊徳の講義等などを通じて、仙吉が理想の農村を目指そうとする様子と、同じ村に住む老農夫の様子が描かれている。

序文には「私は力弱い（略）。私はこの力の弱さを生かしめる力の源を、（略）土に生き、工場に生き、未来への希望に生きる人々に見出さなくてはならない」と記されており、福田の決意が読み取れる。また、この巻では福田が処女詩集『農民の言葉』について記した部分もあり、当時の福田の様子がうかがえる。当初は全八巻、四千枚が構想されていたが、第三巻以降は刊行されなかった。

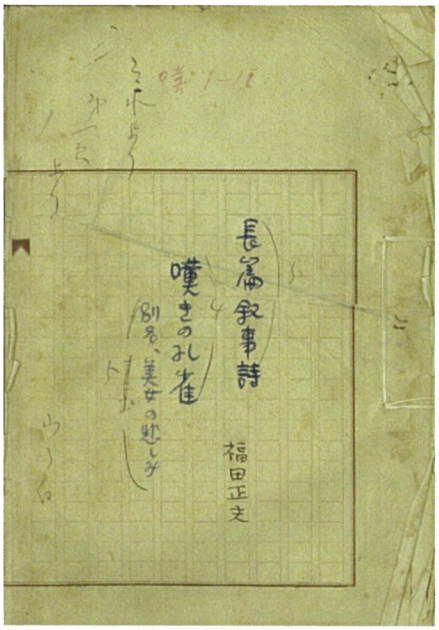
2－2　『高原の處女』（一歩堂、大正 10 年（1921））、当館蔵

福田が初めて世に送り出した長篇叙事詩。

夫に離婚された母と娘が、自殺するために列車に乗った際に旅館の主人に出会い、その旅館で働くことになる。しかし親子は酷使されて母は亡くなり、娘も苦難の人生を歩むというストーリー。

あとがきには「日本にまだ叙事詩は生まれてゐない。よしあつたとしても泰西の雄篇に匹敵するものを見ない。（略）私は詩劇と共に、かうした物語の詩作があつてもいいことを、いつも、考へて来たのである」と記されており、福田の叙事詩に対する考え方や意気込みが読み取れる。

2－3　「嘆きの孔雀」原稿（大正 12 年（1923）7 月 10 日）　当館蔵

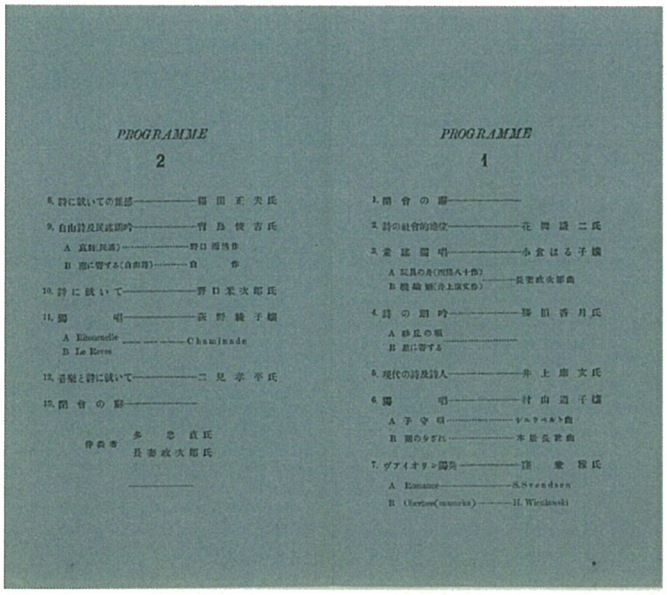


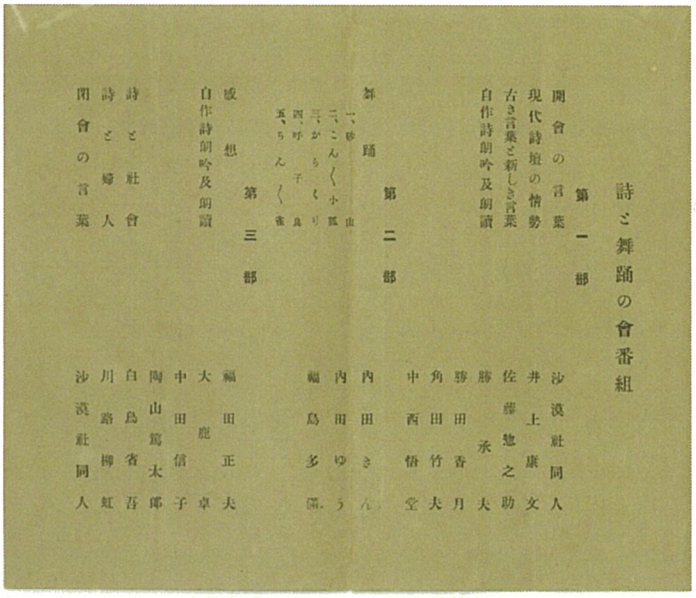
福田三番目の長篇叙事詩の直筆原稿。

苦学生で職工の俊一と舞台女優の美彌子との恋愛がテーマ。俊一は仕事の合間に書いた劇作品「嘆きの孔雀」を美彌子に上演してほしいと頼み、美彌子は舞台が失敗した時は俊一と心中するつもりでの手紙を書く。しかし、美彌子に恋している支配人がその手紙を俊一に届けたことをきっかけに、舞台が失敗したと勘違いした俊一は服毒自殺し、恋人を失った美彌子は舞台上で発狂する。

再出版の際に書かれたあとがきによれば、福田はこの作品を不眠不休で執筆し、十日間程度で完成させたという。原稿では、主人公は武雄と美佐子と書かれており、名前が変更されたことが分かる。

この作品は大正 13 年（1924）に松竹が映画化し（栗島すみ子主演）、大ヒットした。





2－4（左）　「詩人会主催　詩と音楽の会」プログラム（大正 11 年（1922）5 月 7 日）当館蔵

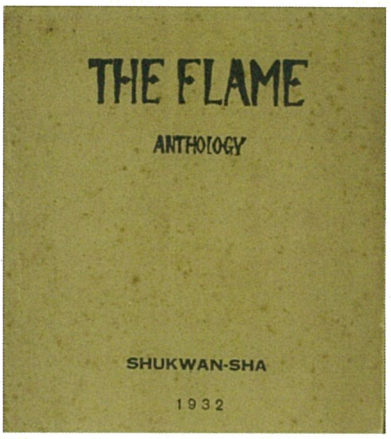
福田と井上康文が「詩についての雑感」「現代の詩及び詩人」という講演を行った会のプログラム。

詩についての講演と童謡の独唱・詩の朗吟（詩歌に節をつけて声高く朗読すること）、ヴァイオリン演奏などが交互に配置されている。『民衆』同人の花岡謙二（はなおかけんじ）の講演や、音楽評論家・二見孝平（ふたみこうへい）の講演も行われたようである。

2－5（前頁下部右）　「詩と舞踊の会」プログラム（大正15年（1926）5月23日）当館蔵

福田が登壇した会のプログラム。沙漠社の同人による詩の朗読や舞踊が行われ、福田・井上康文・白鳥省吾など『民衆』の同人が参加したことが分かる。井上の演題が「古き言葉と新しき言葉」となっていることから、『民衆』が掲げた理念が話題となったのだろう。また野鳥の研究で知られた詩人・歌人の中西悟堂（なかにしごどう）の名前もみられる。

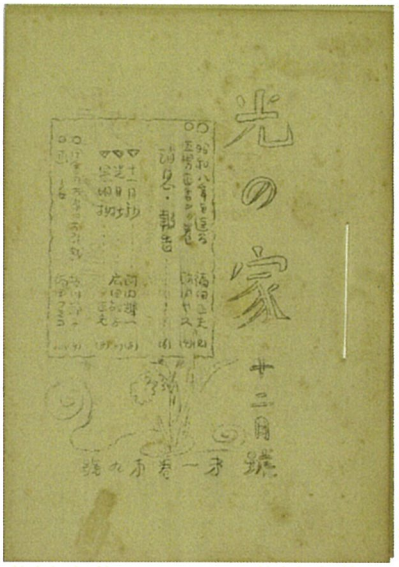
2－6　『焔　年刊詩集』（主観社、昭和7年（1932））当館蔵



昭和3年（1928）に創刊した雑誌『焔』の同人による作品集。福田自身は三作品を掲載している。「三二年二月二十一日・書斎風景」では、自身の子供を「ませて、憎らしく可愛いゝ奴め」と記しており、福田の家庭人としての姿がうかがえる。

『焔』の同人には作家・井上靖（いのうえやすし）もいた。井上は後に、福田との交流について「私が今まで知っている最もあたたかい歓待は、この善意の詩人の家で受けたものであり、最もたのしい雰囲気の会食は、氏のお宅で開かれた「焔」の同人会の食事であったと思う。私は今も詩を書いているが、これは全く「焔」の同人になったためである」と記している。

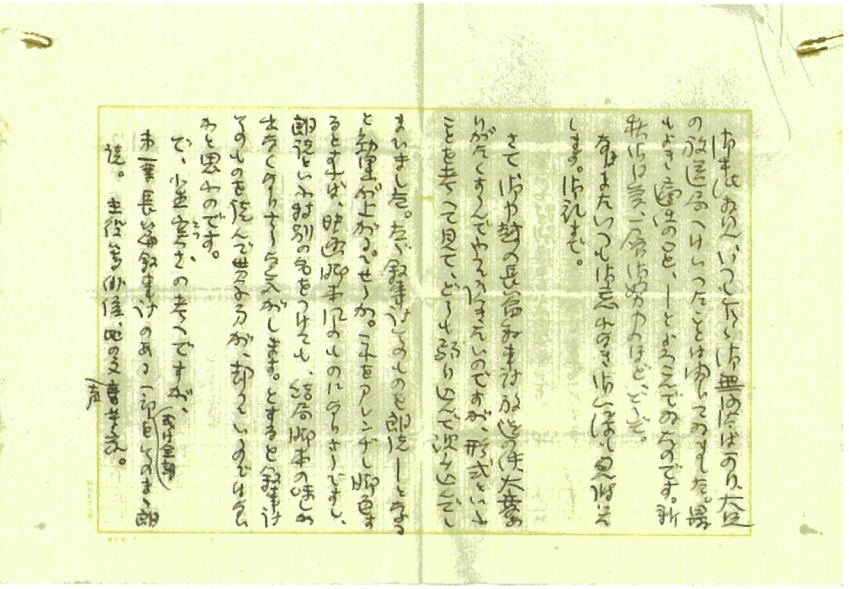
2－7　『光の家』（昭和8年（1933）1月～）　当館蔵



親族内限定の雑誌。編集後記を福田が書いていることから、編集の実務は主に福田が担っていたのだろう。創刊号には「子供達のつくつたもの、短文、詩、歌、句、一筆画なども送って下さい」「消息もわすれないで知らせてください」等と記されている。体裁は簡易で、Ｂ５の藁半紙を二つ折りにしてこよりで綴じている。分量は毎回十頁程度で、親族のエッセイや詩、子供の絵、住所録などが掲載されており、福田をはじめ親族の暮らしぶりがうかがえる。

福田自身のエッセイ「昭和八年を送る」には、「足柄人は、とかく才能はありながら、これを実行にうつすことが臆病」、「私などが、文学者として一流になれないのも、才能はともかくとしまして、実行力…別にいへば押しが足りない」と記されている。

2－8　南江二郎宛書簡（昭和9年（1934）9月20日）　当館蔵



南江からの手紙への返信。福田が長篇叙事詩の放送について、①自身の長編叙事詩をそのまま朗読、②幻想詩劇「死の嶋の美女」を上演、③自身の長編叙事詩を改作する、という案をメリット・デメリットとともに提示している。また、長篇叙事詩のみならず詩の朗吟をプログラムに追加することも提案しており、福田のラジオ放送への積極的な姿勢が読み取れる。

本書簡で触れられているのは、当時大阪中央放送局（現・NHK大阪放送局）が制作していた番組「詩の朗読」と思われる。当時大阪中央放送局は、ラジオ独自の芸術を模索しており、「広く日本語に対する自覚・吟味・発見・愛などを喚起せしめると共に、混乱する国語の浄化と選択」を目的にこの番組を制作した。主に管弦楽の伴奏で詩が朗読される形式で、昭和8年（1933）から二年間にわたって九回放送された。

ラジオ番組「国民歌謡」

昭和11年（1936）～16年（1941）にかけて放送された音楽番組。

大正14年（1925）の放送開始当初は、受信契約者数が50万だったものの、放送網の拡大や受信機の低廉化などで昭和11年（1936）には約300万に増加した。当時、ラジオは人々の娯楽の中心だった。

この時期には大衆歌謡が流行したが、歌詞や歌い方が頽廃的だという批判もあった。これに対して、「健康で明朗でそして誰にも歌い易い歌謡曲を広く家庭に贈る」ことを目的に、大阪中央放送局（現・NHK大阪放送局）が企画したのが「国民歌謡」である。放送曲は日本放送協会（現・NHK）や政府機関などによる委嘱や公募、軍の制定で作られた。放送時間は月～土曜日の午後0時35分から5分間（後に午後7時台に変更）で、同じ曲が一週間放送されるとともに、楽譜と歌詞を掲載したテキストが発行された。昭和12年（1937）の盧溝橋事件をきっかけにした日中戦争の勃発を境に、戦意高揚や国策宣伝が前面に押し出された楽曲が多くなった。この番組で放送され、人気となったのが「椰子の実」や「海ゆかば」である。後に「われらのうた」、「国民合唱」と改称され、戦後は「ラジオ歌謡」になった。

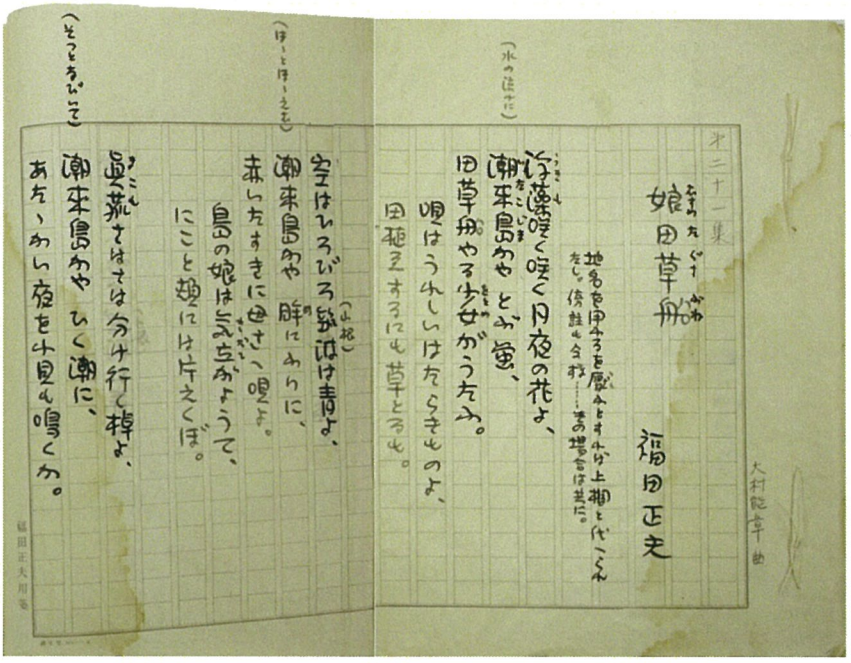
２－９（左）　『国民歌謡　第二十一輯』（日本放送出版協会、昭和12年（1937））ＮＨＫ放送博物館蔵

福田が作詞を手掛け、「国民歌謡」で昭和11年(1936)5月17日から放送された「娘田草船（むすめたくさぶね）」の楽譜が収録されたテキスト。「護れわが空」とセットになっている。

２－１０（右）　『国民歌謡　第二十六輯』（日本放送出版協会、昭和12年（1937））ＮＨＫ放送博物館蔵

福田が作詞を手掛け、「国民歌謡」で昭和12年(1937)10月18日から渡辺はま子の歌で放送された「愛国の花」の楽譜が収録されたテキスト。「戦勝の歌」とセットになっている。作曲を担当した古関裕而（こせきゆうじ）は、「女性らしく美しいメロディ、そして明るく楽しく唱和できる」ように作曲したという。インドネシアのスカルノ大統領が愛唱し、自作の詩もつけたというエピソードでも知られる。

２－１１　「娘田草船」原稿（昭和11年（1936））ＮＨＫ放送博物館蔵

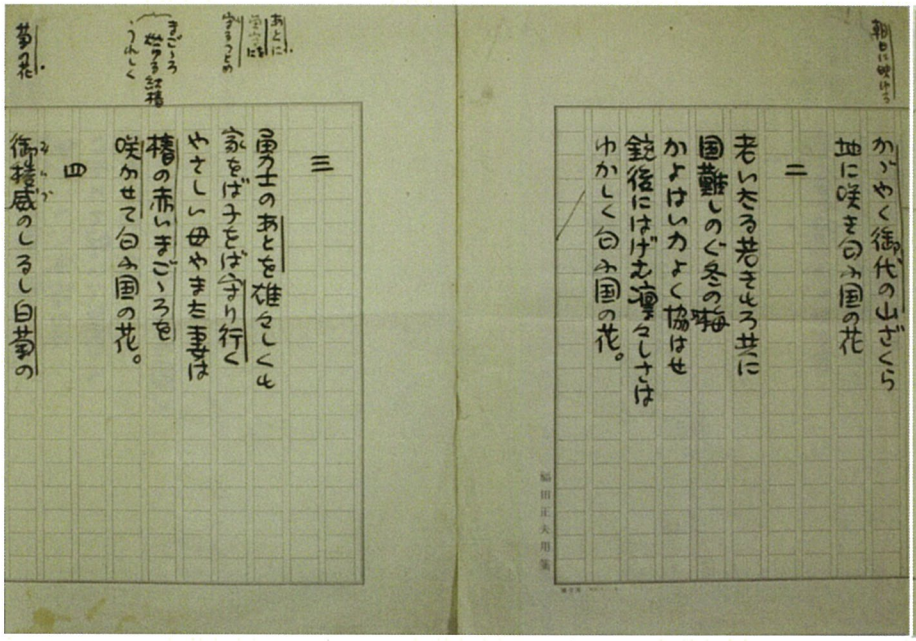


「娘田草船」の直筆原稿。軍の礼式歌として作られた。

冒頭に「地名を用ふるを厭（いと）ふとすれば上欄と代へられたし」と注意書きがあり、「潮来島（いたこじま）」という地名が「水の流れに」といった言葉に置き換えられている。また、最後には「作曲の節、連の第三行と四行の間に、間奏を入れられたし」という要望が記されており、福田のこだわりがうかがえる。

放送後に発行されたテキストでは歌詞が四番までだが、この原稿からは、二番と三番の間に別の歌詞があったことが分かる。

2－12　「愛国の花」原稿（昭和12年（1937））　ＮＨＫ放送博物館蔵



国民歌謡
愛國の花
福田正夫

一
芙蓉の峰のけだかさを
こころのつよい柿として
御国につくす女等は

二
老いたる若さも共に
国難しのぐ冬の梅
かよはいかよく協はせ
銃後にはげむ凛々しさは
ゆかしく匂ふ国の花。

三
勇士のあとを雄々しくも
家をばゝをば守り行く
やさしい母やまた妻は
椿の赤いまごころを
咲かせて匂ふ国の花。

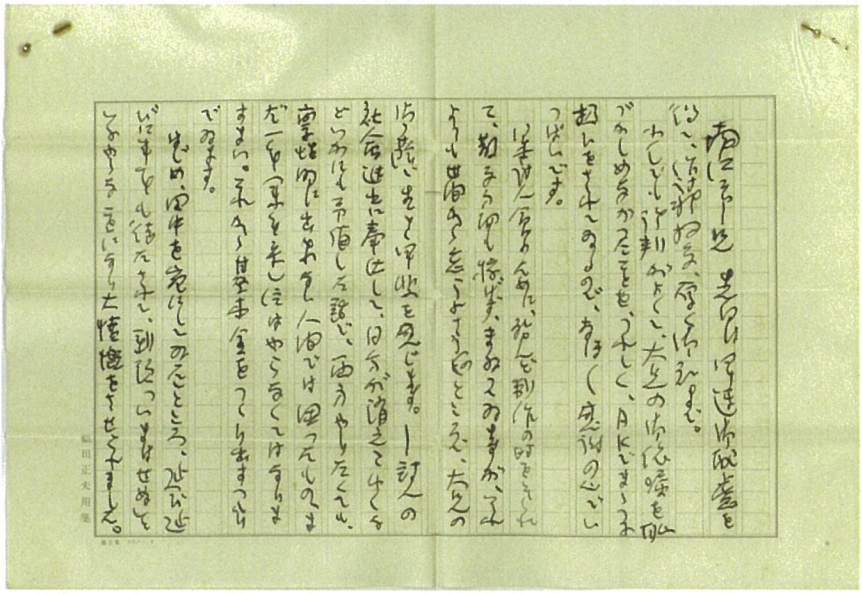
四
かをりに熱く胸を染め
女といつぢ生命かけ
こぞりて咲いて美しく
日本は匂ふ花の国。
〈日本は匂ふ花の国〉

「愛国の花」の直筆原稿。南江二郎を通じて大阪中央放送局から委嘱されて作詞した。

「勇士のあとを雄雄しくも　家おば子をば守りゆく　優しい母やまた妻は」といった一節から、銃後の女性を讃える内容であることが分かる。当時福田の弟子だった詩人の石垣りんは、福田から「日本の女流詩人は何してるんだ、女の歌を男に書いてもらうようじゃあ、しようがないなあ」と言われたと回想している。

四番の「かをりに熱く胸を染め」が、後に刊行されたテキストでは「ゆたかにかほる日の本の」と変更されている。また、同じく四番の「日本は匂ふ花の国」が「光りて匂ふ国の花」と、一～四番が同じ言葉で終わるように変更されている。

2－13　南江二郎宛書簡（昭和13年（1938）11月10日）　当館蔵

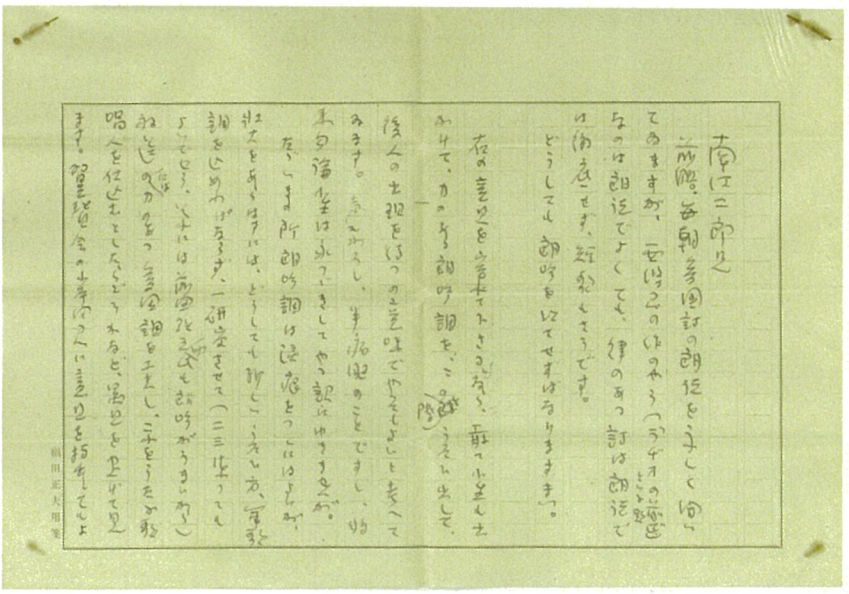


作詞委嘱への御礼や福田自身の近況、詩の朗読についての提案が記されている。

昭和13年（1938）5月に「愛国の花」がコロンビアレコードから発売されており、書簡冒頭で触れられている作品は「愛国の花」を指すと思われる。なお、冒頭の「AK」とは東京中央放送局（現・NHK放送センター）のコールサイン「JOAK」の略。

日本詩人会の活動が多忙なため創作の時間が割けないことや、世間から忘れられることへの焦りが記されており、当時の福田の心情が見えてくる。

2－14　南江二郎宛書簡（昭和16年（1941）12月16日）　当館蔵



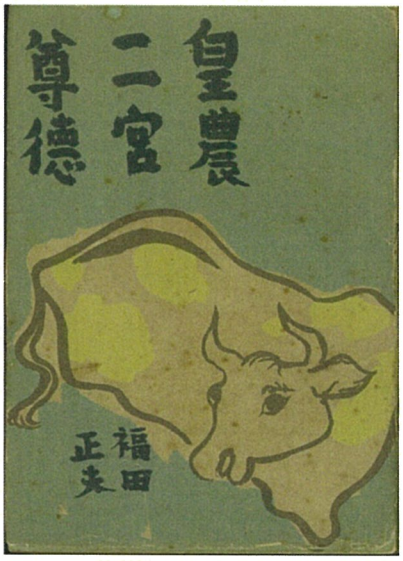
愛国詩の朗読についての感想・意見と自ら詩の朗吟を行う旨の提案が記されている。お涙頂戴の朗吟調だけではなく、壮大さを表現するために軍歌調が必要だと述べており、当時の福田の考えがうかがえよう。

福田は、昭和17年（1942）に文学報国会や大政翼賛会に参加するとともに、小説や評伝を執筆した。

本文末尾には「みそぎのあとで、手がふるへてゐます」と記されている。

2－15　『皇農　二宮尊徳』（三杏書院、昭和17年（1942））　当館蔵

尊徳の生涯を通時的に辿った作品。会話や尊徳本人の気持ちが多く記されるなど、読みやすくするための工夫が見受けられる。また「愛と戦ひ、二つの奉仕をつとめるからこそ、土では稲のみのりをこゝに帰一してよろこぶ。工業ではその生産を帰一してよろこぶ」「貯蓄すれば国は戦費を利し、子孫は繁栄する」などと、それぞれのエピソードに即した教訓が挿入されている。



2－16　『光の種子』（奥川書房、昭和18年（1943））、当館蔵

表題作の他、三篇が収録されている。両親を失った孤児の主人公・重吉が、引き取られた村で荒れ地を開墾するなど苦難を経て成長するストーリー。当時、福田は日本劇画協会に協力しており、この作品も紙芝居に翻案されたという。

第三章　語り継がれる足跡

昭和27年（1952）に福田は亡くなった。戦後は主に俳句や校歌の作詞、少女小説などを手掛けた。

没後、昭和33年（1958）に民衆詩派を顕彰するために、建碑計画が持ち上がり、小田原市城内の水の公園に民衆碑が建てられるとともに、昭和41年（1966）には小田原市早川の久翁寺に福田の詩碑も建てられた。

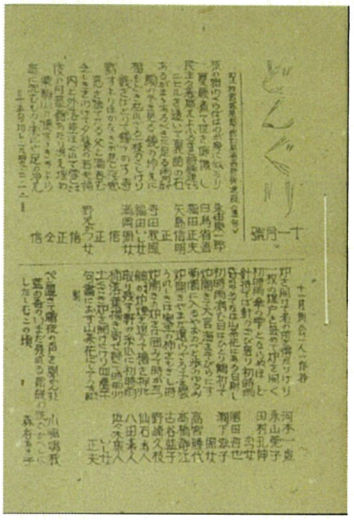
福田の足跡は現在も語り継がれている。

『どんぐり』会が始まって以来、毎月わが家で『どんぐり』を作った。父がガリ版の原紙を切ると、あとは六人兄妹、母、総動員で、父の書斎であった二階の八畳に集まり、仕事をした。（略）紙は今のザラ紙、当時で言うわら半紙であった。（略）インクが乾くとみんなで二つに折る。そしてページ順にずらりと並べる。ずらり、と言ってもそう多いページ数ではない。多くても五枚分ぐらい。それをまた順に、誰かれなく一枚ずつ拾って一冊にする。大きいホチキスで、ガチャン、ガチャンと二か所をとめる。みんな、ホチキスとは言わず、ガチャンと言った。「ガチャンはどこだ。」「ガチャンかして。」（略）

毎月一回、ある晩、父の書斎で働きながら、家族揃った団欒の時がくり返されていた。

福田美鈴「解説　―あとがきに代えて―」（福田正夫『句集　冬木立』より）

3－1　句誌『どんぐり』（昭和 24 年（1949）11 月）当館蔵

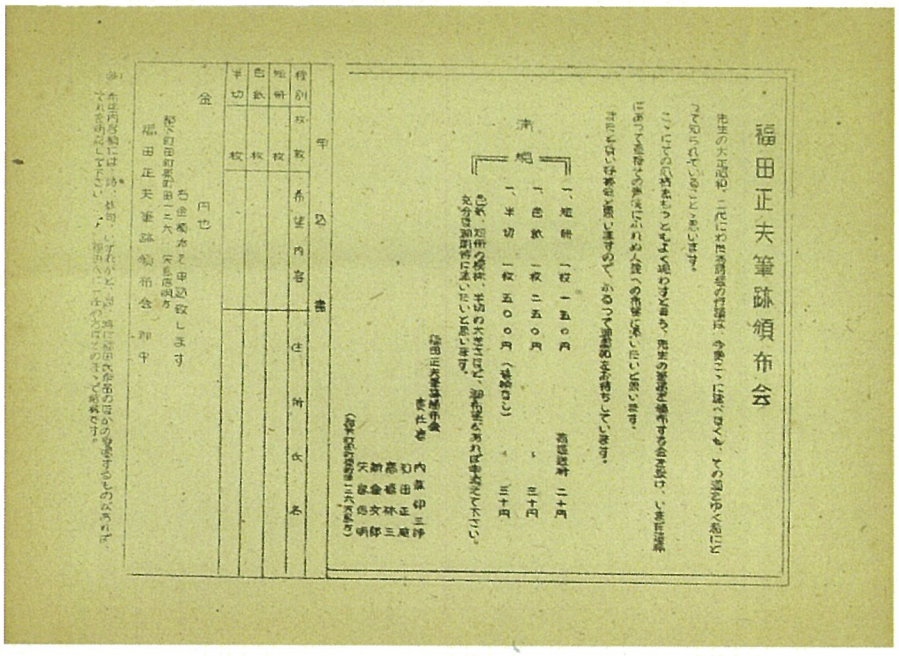


福田が主宰して昭和 15 年（1940）～27 年（1952）まで発行された俳句雑誌。例会で発表された作品や特定のテーマに沿った作品が掲載されている。福田は大正時代に白鳥省吾や室生犀星、萩原朔太郎らと伊豆半島を旅行した際に俳句を作り始めたようである。

藁半紙にガリ版刷、こよりで綴じた簡素な冊子で、家族総出で印刷や発送を行ったという。

展示資料は宮城県築舘（現・宮城県栗原郡築館町）に白鳥省吾の詩碑が建設された際のもの。福田は「民主々義 燃えよふるさと 詩碑建ちて」という句を寄せている。

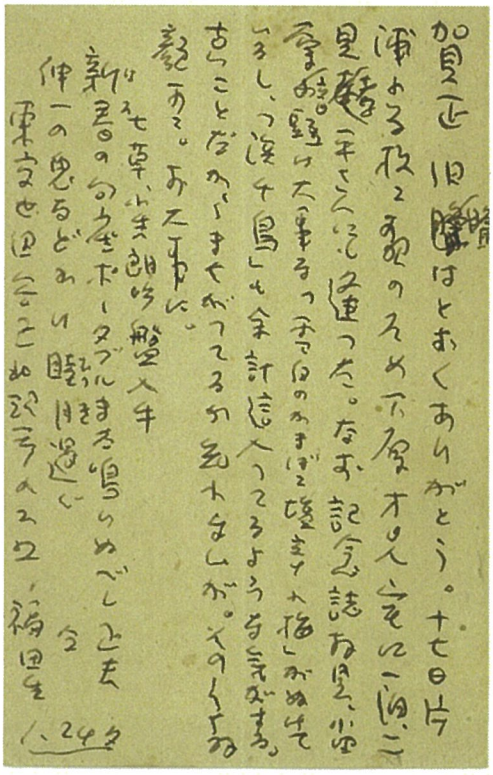
3－2　筆跡頒布会チラシ（昭和 25 年（1950）頃か）当館蔵



年代が記されていないが、昭和 25 年（1950）6 月発行の『どんぐり』に同会の告知が掲載されているため、この頃行われたものと推測される。紙の大きさや模様、作品など希望を幅広く受けたようである。

昭和 10 年（1935）には、福田の慰労と妻・いし子の病気見舞を兼ねて、島崎藤村・北原白秋・室生犀星・山口蓬春らが色紙や短冊に揮毫して頒布会を行った。福田が多くの人に恵まれていたことがうかがえる。

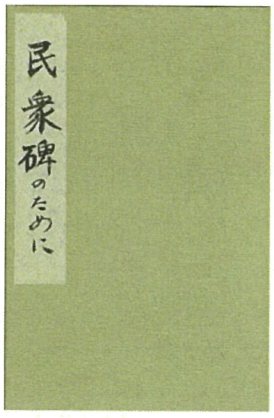
3－3　石井富之助宛葉書（昭和 26 年（1951）1 月 24 日）　当館蔵



小田原市立図書館長を務めた石井への葉書。小田原市立片浦小学校の校歌や小田原音頭について触れられている。石井の回想によれば、福田は小田原に来ると必ず同図書館の石井の所を訪ねていたという。

福田は小田原を離れた後も、小田原市立本町小学校の校歌作詞、小田原の市民歌制定の際に審査に携わるなど、小田原との縁があった。

3－4　『民衆碑のために』寄付芳名帳（昭和 33 年（1958））　当館蔵



福田の没後、民衆詩派の業績を語り継ぐために建碑運動が行われた際のもの。

吉川英治や室生犀星・井上靖・大佛次郎などの名前がみられる。

展示資料翻刻

1―3　白鳥省吾宛葉書　大正六年（一九一七）一〇月七日

小田原から正月雑誌出る。「民衆」
僕が編輯するのださうです。原稿
下さい。どうぞ十月末日迄に。
科学と文芸位の大きさ。三十頁
位。右早々

1―6　福田雅子（いし子）から南江二郎宛書簡　大正一〇年（一九二一）一〇月一六日

先日ハ大そうよい栗を御送り下さい
まして有りがたう存じました。　丁度
十三夜様で志たので、早速御月様に
上げました。そして後、福田始め家人と
大よろこびで頂戴したした。阿まり
おいしいのでおすそわけ志やうなどと申して
居ります。
　福田ハいつも御ぶさたのみしてゐます。
只今カーペンタア詩集を翻訳中なの
ですけど、仕事がはかどらないといつて
苦しんで居ります。
いよ〳〵さむくなつて参ります。どうぞ
御自愛を。
　一同よりよろしく申し上げます。
拾月拾五日　　福田雅子
南江二郎様

1―9　井上康文宛葉書　一〇月二五日（年不明）

「自由詩」に（ママ）御承申上げるが、十一
月十九日午、（小生はあと）石橋辻村
宅にみかんもぎに行くつもり故、愛子さ
んよかったら一しよされるよう知らせとい
て下さい。畑でたべるのは無頼持返り
分は幾らかやることにしたくどうぞ。同
行者（いし女も）十一時のバスで行くし、小生は湯
本に行くので二、三時になるかも知れぬ。御礼が
てら。
　世田谷区北沢三―九二五
　十月二十五日　福田正夫

2—8　南江二郎宛書簡
昭和九年（一九三四）九月二〇日

御手紙拝見、いつも乍ら御無沙汰ばかり、大兄の放送局へはいつたことは聞いてゐました。最もよき適任のこと、—とよろこんでゐたのです。新秋御自愛、一層御努力のほど、どうぞ。

なほまたいつも御忘れなき御心深も感謝いたします。御礼まで。

さて、御申越の長篇叙事詩放送の件、大変ありがたくすゝんでやつて頂きたいのですが、形式といふことを考へて見て、どうも弱り込んで沈み込んでしまひました。たゞ叙事詩そのものを朗読—となると効果が上がるでせうか。これをアレンヂし脚色するとすれば、映画脚本風のものになりさうですし、朗読といふ特別の名をつけても、結局脚本の味しか出なくなりさうな気がします。とすると叙事詩そのものを読んで貰ふ方が、却つていゝのではないかと思ふのです。

で、小生突さの考へですが、

第一案長篇叙事詩のある一部或は全部をそのまゝ朗読。主役等俳優、地の文声楽家。

と考へます。—これは全部のある部分を短かくするなど、やり方はありませうが、小生としては三回位にわたつて、全部をやつて頂ければなほ有難い訳で、大衆味もありますし、効果あること、存じます。実際一部分の書き直し、脚色など、なると、創作以上の苦心をなめる訳ですし、原作以上の味が出るか出ないか疑問です。小生いま少し読んでみて、原作のまゝで話の味が十分あることを感じました。で、小生の叙事詩の中から四つをえらんで御送りしてみます。小生としては1「破れ胡蝶」（これは犯罪事件あり、いけなければ）2「輝ける薔薇」、「嘆きの孔雀」と「高原の処女」はあまり有名になつちやつてゐますが、中へ入れました。

ところで、小生として最大の希望は、

第二案　幻想詩劇「死の嶋の美女」をそのまゝ

やつて頂きたい。

といふことです。地の文のむづかしいのは、少し易しくしてもいゝ。これは松竹にて映画化をすることになつてゐたのを、金とむづかしさで果たせずにしまつたものですが、小生としては後にのこして恥づかしくないもの、叙事詩と詩劇を組み合せてあります。たゞ難をいへば少しむづかしいか知れません。しかし朗読の

運動としては最も適当と信じます。（原作送る）
が、第一、第二いづれも及第しないのならば、こゝに苦労を覚悟で、
第三案　長篇叙事詩のいづれかを、「死の嶋の美女」のやうに書きなほす。形式　叙事詩と詩劇を交へる。
といふことになります。これが三日となれば第一日原作紙朗読、第二日脚本風にアレンヂして、第三日朗読と脚色を交へるなどの技巧もありませう。とにかくいづれの案にせよ、きめて下されば努力しますから、どうぞ。
以上、御返事まで。

なほ、叙事詩等出版社ではいま増刊をつゞけてゐませんので、問ひ合はしてみますが、小生手許には原本として一部よりづゝなく、御確定の上御返送願ひたいのです。そちらで御入用とすれば、新しく取りよせます。（本があると仮定して）それを改めて送らして下さい。無ければコツピイを取るか、古本を探すかするより致方ないでせうが、大抵あると思ひます。
「死の嶋の美女」はこの秋栗原氏が舞踊にしたい由でしたが、小生に脚色のいとまなく、相談のまゝで流してしまひました。念のため御断はり申上げておきます。世にあらはれたのではありませんが……。

なほ詩の朗吟は小生もやつて居り、出来たらいつでも、そちらのプログラムに入れて下さいませんか。北原三木川路小生のもの等大正期の詩人のものも、やつて頂けるといゝと思ひますし、小生にやらして下さるなら、その用意があります。伴奏も小松清君がつくつてくれたものがあり、朗吟とぴつたり当てはまつてゐるやうです。やるとなれば新しくまた外のをつくつて貰ふやうになるでせうが。
右、御返事旁々。
いづれ御確報を作つて再信、余は後便にゆづります。
九月十九日ニ記　　福田正夫

与聞他へ放言せぬ件承知しました。家庭内だけでは致方ありませぬが……。

2―13　南江二郎宛書簡　昭和一三年（一九三八）一一月一〇日

南江二郎兄　先日は早速御配慮を
得て、作詞料拝受、厚く御礼まで。
少しでも評判がよくて、大兄の御依嘱を恥
づかしめなかつたことを、うれしく、ＡＫでま、つ子
扱ひをされてゐるので、なほ〳〵感謝の心でいつ
つぱいです。
日本詩人会のために、殆んど制作の時をとられ
て散文方面も稼げず、まゐつてゐますが、それ
よりも世間から忘られさうのところで、大兄の
御蔭で生き甲斐を感じます。―詩人の
社会進出に奉仕して、自分が消えてゆくな
どいかにも矛盾した話で、両方やりたくても、
稟性的に出来ない人間では困つたもの、ま
だ一年（来年度）位はやらなくてはなりま
すまい。これから基本金をつくり出すつもり
でゐます。
はじめ、田中を宛にしてゐたところ、延び延
びに本年も待たされて、到頭「いまはせぬ」と
いふやうなことになり大憤慨をさせられました。
いつものやり方で、―気を持たせてられた僕が、
またそれにかゝつたのがわるいのです。

詩の朗読コンクールも、あとでＡＫに放送を交渉しま
したが、「はじめ番組にいれることを考へたが、わ
けがあつて」といふので断はられました。「わけが」
といるのが気にかゝります、恐らく永久にこちら
は駄目でせう。
そちらで時局の新作詩を放送させて下さる
やうな気持はありませんか？コンクールの優勝
者でもよく、それに小生が加はつてもよく、喜志
君などそちらの人々と組んで、新作の時局に対
するものをやつても（或は発表作品）面白からう
と思ひます。日本詩壇でめたものや、先輩の
戦時気分の作を集めてもよいでせう。詩の朗
読が絶えてゐるのでさびしく、次手に申上げてみ
ました。
右、御礼旁々。

十一月十日　　福田正夫

2―14　南江二郎宛書簡　昭和一六年（一九四一）一二月一六日

※封筒裏面に「昨日は速達二通までして失礼。これは全然別へ愛国詩□への意見です。それも速達します。」との書き込みあり。

南江二郎兄

前略。毎朝愛国詩の朗読をうれしく聞いてゐますが、西條君の作のやう（「ラヂオの前で」といふ題）なのは朗読でよくても、律のある詩は朗読では徹底せず、短歌もさうです。

どうしても朗吟を以てせずばなりますまい。

右の意見を容れて下さるなら、敢て小生も出かけて、力のある朗吟調を、この際うたひ出して、後人の出現を待つの意味でやつてもよいと考へてゐます。声もわろし、半病躯のことですし、将来勿論小生は永つゞきしてやる訳にゆきませんが。

たゞいまの所朗吟調は涙痕をつくるにはよいが、壮大をあらはすには、どうしても新しいうたひ方、軍歌調を込めねばならず、一研究させて（二三集つてもよいでせう、それには前田鐵之助氏も朗吟がうまいから）放送には力のある愛国調を工夫し、これをうたふ歌唱人を仕込むとしたらどうかなど、愚見を申上げて見ます。翼賛会の岸田君に意見を持出してもよいのですが、放送技術の問題故、大兄を通して放送局の方へ申上げてみるのです。

みそぎのあとで、手がふるへてゐます、御判読を乞ふ。

福田正夫

十二月十六日

3―3　石井富之助宛葉書　昭和二六年（一九五一）一月二四日

賀正　旧臘はとおくありがとう。十七日片
浦小学校々歌のために下原大兄宅に一泊、二
見孝平さんにも逢つた。なお記念誌拝見、小田
原音頭は大事な「白のかまぼこ塩辛小梅」がぬけて
いるし、「浜千鳥」も余計這入つてるような気がする。
古いことだからまちがつてるか知れないが。そのうち拝顔
まで。お大事に。

七草、小生朗吟盤入手
新春の句□ポータブルまた鳴らぬべし　正夫
伸一の鬼などれい睦月過ぐ　仝

東京世田谷区北沢三ノ九二五　福田生

・特記なき資料は全て福田正夫発の葉書・書簡です。
・翻刻にあたっては常用漢字等に改めた箇所があります。
・文字下げ、行替等は原資料の通りとしました。
・□は判読困難を示します。

主要参考文献　（◎は福田の著作・対談など）

・『昭和ニュース事典』各巻、毎日コミュニケーションズ
・『日本文学の歴史　第11巻「人間賛歌」』角川書店、昭和43年
・『福田正夫――追想と資料――』小田原市立図書館、昭和47年
・『放送五十年史』日本放送出版協会、昭和52年
・『追想　福田正夫―詩と生涯』冬至書房新社、昭和55年
・古関裕而『鐘よ鳴り響け　古関裕而自伝』主婦の友社、昭和55年
・古茂田信男ほか『日本流行歌史〈戦前編〉』思想社、昭和56年
・雑喉潤『いつも歌謡曲があった　―百年の日本人の歌―』新潮社、昭和58年
・福田美鈴『父福田正夫――雷雨の日まで』教育出版センター、昭和58年
◎『福田正夫全詩集』教育出版センター、昭和59年
・『資料　福田正夫―人間と芸術』教育出版センター、昭和60年
・石井富之助『小田原と文学』小田原文芸愛好会、平成2年
・乙骨明夫『現代詩人群像　－民衆詩派とその周圏』笠間書院、平成3年
・大門正克『明治・大正の農村』岩波書店、平成4年
◎福田正夫『句集　冬木立』福田正夫詩の会、平成5年
◎福田正夫ほか「民衆詩派について語る会」（伊藤信吉編『激動期の詩と詩人』川島書店、平成5年）
・櫻本富雄『日本文学報国会　大東亜戦争下の文学者たち』青木書店、平成7年
・村椿四朗「雑誌『民衆』論」
（日本現代詩研究者国際ネットワーク編『日本の詩雑誌』、有精堂出版、平成7年）
・『こちらＪＯＢＫ　ＮＨＫ大阪放送局七十年』日本放送協会大阪放送局、平成7年
・『近代文学研究叢書　第七十一巻』昭和女子大学近代文化研究所、平成8年
・池田浩士「それは多義的な始まりだった」
（栗原享夫編『文学史を読みかえる①　廃墟の可能性　現代文学の誕生』、インパクト出版会、平成9年）
・坪井秀人「近代の詩と歌謡と　――その危険な関係――」（『文学』10-2、岩波書店、平成11年4月）
・安智史「民衆詩派・モダニズム・ソング」（『昭和文学研究』43、昭和文学会、平成13年9月）
・安智史「論争する民衆詩派　――白鳥省吾ＶＳ.北原白秋　その周辺――」
（『日本近代文学』67、日本近代文学会、平成14年10月）
・阿部猛『近代日本の戦争と歌人』同成社、平成17年
・金子秀夫『福田正夫・ペンの農夫―詩作品鑑賞を中心に―』夢工房、平成19年
・戸ノ下達也『音楽を動員せよ　統制と娯楽の十五年戦争』青弓社、平成20年
・吉野孝雄『文学報国会の時代』河出書房新社、平成20年
・見城悌治『近代報徳思想と日本社会』ぺりかん社、平成21年
・小松裕『「いのち」と帝国日本』小学館、平成21年
・戸ノ下達也『「国民歌」を唱和した時代　昭和の大衆歌謡』吉川弘文館、平成22年
・伊藤整『近代日本の文学史』夏葉社、平成24年

凡例

・この小冊子は平成25年（2013）3月23日（土）～5月26日（日）を会期として小田原文学館で開催する同名展示の解説書です。

・本展企画に際し、福田正夫四女・福田美鈴氏にご監修を賜りました。ご芳名を記し、心より感謝申し上げます
・本展開催及び本冊子作成にあたり、磯﨑咲美・ＮＨＫ放送博物館の各氏・機関よりご協力を賜りました。ご芳名を記し、心より感謝申し上げます。
・本冊子の編集及び執筆は小田原市立図書館学芸員の鈴木一史が行いました。

・引用の際、適宜新字体等に改めた箇所があるとともに、敬称等は省略しました。
・展示内容と本冊子の掲載内容は異なる場合があります。

平成25年3月発行　小田原市立図書館（禁無断転載）

『福田正夫　小田原が生んだ民衆詩人』正誤表

該当ページ	該当箇所	誤	正
5 ページ	第二章　章解説　本文 4 行目	小田原小唄	小田原節
16 ページ	書簡翻刻　本文 16 行目	前田□之助	前田鐵之助
17 ページ	葉書翻刻　本文 2 行目	大原大見	下原大兄

『福田正夫　小田原が生んだ民衆詩人』　正誤表

該当ページ	該当箇所	誤	正
5 ページ	第二章　章解説　本文 4 行目	小田原小唄	小田原節
16 ページ	書簡翻刻　本文 16 行目	前田□之助	前田鐵之助
17 ページ	葉書翻刻　本文 2 行目	大原大見	下原大兄

『福田正夫　小田原が生んだ民衆詩人』　正誤表

該当ページ	該当箇所	誤	正
5 ページ	第二章　章解説　本文 4 行目	小田原小唄	小田原節
16 ページ	書簡翻刻　本文 16 行目	前田□之助	前田鐵之助
17 ページ	葉書翻刻　本文 2 行目	大原大見	下原大兄

『福田正夫　小田原が生んだ民衆詩人』　正誤表

該当ページ	該当箇所	誤	正
5 ページ	第二章　章解説　本文 4 行目	小田原小唄	小田原節
16 ページ	書簡翻刻　本文 16 行目	前田□之助	前田鐵之助
17 ページ	葉書翻刻　本文 2 行目	大原大見	下原大兄